

大学生の友人関係

— 5つの大学におけるグループの特徴に関する調査から —

吉田 浩子^{*1}

はじめに

青年期の重要な対人関係の一つに友人関係がある。友人関係は「互いの社会 情緒的目的を促進しようと意図し、友好、親密さ、感情、相互扶助の様々なタイプと程度を含む、時間にとらわれない二人の間の自発的な相互依存」であると言われている¹⁾。それまでの依存的で親中心であった時期とは違い、自立性や自己の確立をしていく時期である青年期の若者にとって、友人関係は、対人能力や性格、情緒などの自己の内面に關心を向け、理想の自己像と現実の自己像を比較することによって自己を評価するために重要な意味を持つ。また、児童期から青年期に移る過程において、ただの遊び仲間から特定の友人としての付き合いに変化していき、対等な人間関係として考えや悩みを語り合う友人との関係は、心理的に大きな支えとなり、欠かせない存在であると言えよう。

この友人関係の特徴の一つに関係の構築が自発的に行われるという点があり、その過程においての友人との相互作用の様態が後続の関係の型を決定し、友人関係そのものの発展、または崩壊の方向を位置づけてしまう²⁾。だからこそ親密になっていく過程の検討が、青年の友人関係のあり方について理解を深めていくために重要な意味を持つことになる。

この青年期の友人関係については落合・佐藤³⁾をはじめ、中学生、高校生、大学生の学校内における対人関係を中心に、調査・研究されている⁴⁻¹⁶⁾。

吉田らは、これらの調査を参考に1999年にK大学において実態調査を実施した¹⁵⁾。その結果、調査対象とした学生の90.1%の学生が「グループ」(「大学構内で行動を共にする自然発生的集団で、学年と学科の同じ人の集まり」と定義)に所属していることがわかった。この結果を受けて2001年に同大学における大学生のグループ内における友人関係について調査した¹⁶⁾。その結果、K大学では9割以上の学生

がグループに所属し、その構成人数が「3~4人」、「5~6人」のグループが多い、これらのグループは自然発生的に生まれ、物理的距離の近さがきっかけになることが多い、等の知見が得られた。中でも、調査対象者のグループの友人関係に、女子高生特有と言われている互いの行動を同調させ共に同じ行動を取る「同調行動⁶⁾(共行動⁴⁾)」が見られることが明らかとされ、先行研究との違いが注目された。

そこで、本研究は、最終的には現代大学生の対人関係の特徴を友人関係の側面から明らかにすることを目的に、その一助として、以上の調査結果がK大学特有の特徴であるのか、それとも他大学においても見られる現代大学生全般に共通して見られる特徴であるのかを検討することを目的とする。具体的には、K大学を含む任意の5つの大学の学部学生を対象に、2001年に実施した調査¹⁶⁾とほぼ同様の調査を実施した。

方法

2001年11月~12月にK大学および同じ県内にあるA大学、B大学、C女子大学、D女子大学において、2001年にK大学学生を対象に使用した質問紙¹⁶⁾と同様の質問紙を用いて予備調査を実施した。2001年の調査結果及び予備調査結果を参考に本調査用紙を作成し、2002年1月~2月に、同様の5大学において本調査を実施した。各大学の学生に無作為にアンケート用紙を配布し、その際「このアンケートの結果はすべて統計的に処理され、個人のデータが使用されることはありません」と文面にて教示した。回答終了後、アンケートはその場で直ちに回収した。その結果、各大学130人の回答を回収した(表1)。無回答・記入もれ等の不備はなく、アンケートの有効回答率は100%であった。従って、得られた全ての回答を解析の対象とした。

解析にはSPSS Windowsを使用した。グループ内の友人関係のあり方を分析する際には得られた結果

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科
(連絡先) 吉田浩子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

表1 調査対象者

大学名	男子(人)	女子(人)	合計(人)
K大学	54	76	130
A大学	60	70	130
B大学	92	38	130
C女子大学	0	130	130
D女子大学	0	130	130
合計	206	444	650

を因子分析によって解析した(バリマックス回転を使用)。

結 果

[1] グループ所属の実態

得られた5つの大学全ての回答を総合し解析した結果,及び大学ごとの解析結果を以下に示す(表2)。

1. グループ所属の実態

調査対象者数全体の87%が「グループに所属している」と答えた。

この「グループに所属している」と答えた564人

表2 グループ所属の実態

	全体	男子	女子	K大学	A大学	B大学	C女子大	D女子大
a. グループに所属	87 (%)	82 (%)	88 (%)	91 (%)	89 (%)	80 (%)	88 (%)	86 (%)
b. 所属グループの数								
ひとつ	50 (%)	41 (%)	64 (%)	51 (%)	47 (%)	62 (%)	42 (%)	50 (%)
複数	50	59	36	49	53	38	58	50
c. 構成人数								
2人	4 (%)	2 (%)	5 (%)	0 (%)	8 (%)	2 (%)	4 (%)	5 (%)
3人-4人	35	33	36	24	40	42	33	36
5人-6人	39	40	38	62	31	35	42	22
7人-8人	13	11	14	12	2	13	14	27
9人以上	9	14	7	2	19	8	7	10
d. 所属のきっかけ(複数回答)								
1. 近くに座った	195 (人)	52 (人)	143 (人)	48 (人)	44 (人)	24 (人)	46 (人)	33 (人)
2. 学籍番号が近い	136	40	96	32	31	14	38	21
3. 同窓	107	28	79	10	16	20	32	29
4. 偶然話した	286	77	209	66	55	64	38	63
5. 入れてもらった	19	2	17	0	6	2	6	5
6. 部活が同じ	137	43	94	22	46	22	18	29
7. その他	46	17	29	10	14	12	4	6
e. 所属理由(複数回答)								
1. 気が合う	456 (人)	135 (人)	321 (人)	100 (人)	85 (人)	82 (人)	94 (人)	95 (人)
2. 1人はさみしい	128	37	91	34	30	14	20	24
3. 情報交換	136	56	80	32	47	24	14	19
4. 楽しい	451	115	336	90	99	66	106	90
5. 趣味の一致	194	72	122	34	49	48	34	29
6. 意見の一致	104	22	82	16	28	14	18	28
7. やさしい	169	45	124	44	25	26	36	38
8. 短所を指摘	99	35	64	24	27	22	10	16
9. 得をする	12	12	0	0	6	6	0	0
10. その他	17	10	7	0	8	4	0	3

a. b. c. は調査対象者数全体に対する「グループに所属している」と回答した人数の割合をカテゴリー別に示した。d. e. は、各項目を選択した人数をカテゴリー別に示した。

各項目の特徴を簡単に示した。a. では、男女間に有意差があった($\chi^2=5.87$ $p<0.05$)。

c. d. e. については、各項目を選択した人数の割合に男女間および大学間で有意差があった。

(c. 男女間 $\chi^2=9.93$, 大学間 $\chi^2=93.33$, d. 男女間 $\chi^2=6.14$, 大学間 $\chi^2=74.36$,

e. 男女間 $\chi^2=57.3$, 大学間 $\chi^2=89.91$, $p<0.05$)。

に、所属グループが「ひとつ」か「複数」か、その数を尋ねた。「ひとつ」のグループに所属している人数、「複数」のグループに所属している人数も、共に282人(50%)だった。男子学生よりも女子学生が有意に多くグループに所属しており($\chi^2=5.87$ $p<0.05$)、男子学生に比べ女子学生は「ひとつ」のグループに所属している学生の割合が有意に高かった($\chi^2=7.19$ $p<0.05$)。また、調査対象とした全ての大学において、回答者の8~9割の学生がグループに所属しており、グループ所属の有無に関する傾向に大学間に有意差はなかった。さらに、所属グループの数に関しても、大学間に有意差はなかった。

2. グループの構成人数

調査対象とした全ての大学において、ほとんどの学生がグループに所属していることが確認されたので、次にそのグループの構成人数について調べた。現在所属しているグループの構成人数を、5項目(「2人」、「3~4人」、「5~6人」、「7~8人」、「9人以上」)の中から選択してもらった。複数のグループに所属している人には、一緒にいることが一番多いグループについて選択するよう教示した。「現在グループに所属している」と答えた調査対象者全体に対して、構成人数が「5~6人」と答えた学生の割合が最も高く(39%)次に「3~4人」と答えた学生の割合が高かった(35%)。このグループの構成人数に関しては、各項目を選択した人数の割合の傾向に男女差があり($\chi^2=9.93$ $p<0.05$)、特に「9人以上」を選択した男子学生の割合は女子学生の2倍以上であった。さらに、グループの構成人数に大学間で有意に差があった($\chi^2=93.33$ $p<0.05$)。K大学は他大学に比べて「5~6人」のグループに所属している人数の割合が多く、A大学は他大学に比べて「2人」、「9人以上」のグループに所属している人数の割合が多かった。また、C女子大学は「7~8人」のグループが多かった。

3. グループに所属したきっかけ

このようなグループはどのようにして成立したのか、グループが構成されたきっかけについて調べた。グループが構成されたきっかけについて、7項目(1.入学式をはじめ、新入生オリエンテーションの時、偶然近くに座っていたから、2.学籍番号が近かったから、3.卒業した学校(中学、高校、予備校等)の友達がいたから、4.偶然話してみたら、互いに仲良くやっていけそうだったから、5.以前所属していたグループの人とうまくいかず、今のグループが受け入れてくれたから、6.部活また

はサークルが同じだったから、7.その他)の中から当てはまるものを全て選択してもらった。

調査対象者全体では、「4.偶然話してみたら、互いに仲良くやっていけそうだったから」を選択した学生の人数が最も多く(286人)、次いで「1.入学式をはじめ、新入生オリエンテーションの時、偶然近くに座っていたから」を選択した学生が多かった(195人)。このグループに所属したきっかけについても、男女間($\chi^2=6.14$)および大学間($\chi^2=74.36$)で各項目を選択した学生の人数の割合に有意差があった($p<0.05$)。また、各大学で最も多くの学生がグループ所属のきっかけとして回答した項目は、K大学、A大学、B大学、C女子大学では「4.偶然話してみたら、互いに仲良くやっていけそうだったから」、D女子大学では「1.入学式をはじめ、新入生オリエンテーションの時、偶然近くに座っていたから」であった。

4. グループに所属している理由

では、なぜ現在のグループに所属しているのだろうか。その理由について調べた。グループに所属している理由について10項目(1.気が合うから、2.一人であるのが寂しいから、3.講義やテストなどの情報交換をするから、4.一緒にいて楽しいから、5.趣味や興味が一致するから、6.意見や考えが一致するから、7.グループの人達の性格が優しいから、8.自分の短所やミスを教えてくれるから、9.食事をおごってくれるなど物理的に得をすることが多いから、10.その他)の中から当てはまるものを全て選択してもらった。

調査対象者全体では、「1.気が合うから」を選択した学生が最も多く(456人)、次いで「4.一緒にいて楽しいから」を選択した学生が多かった(451人)。

このグループに所属している理由について、男女間($\chi^2=57.3$)および各大学間($\chi^2=89.91$)で各項目を選択した人数の割合に有意差があった($p<0.05$)。更に、各大学にいくつかの特徴が見られた。A大学は他大学に比べて「3.講義やテストなどの情報交換をするから」、「9.食事をおごってくれるなど物理的に得をすることが多いから」、を選択した人数の割合が高かった。B大学は他大学に比べて「5.趣味や興味が一致するから」、「9.食事をおごってくれるなど物理的に得をすることが多いから」を選択した人数の割合が高かった。C女子大学は他大学に比べて「4.一緒にいて楽しいから」を選択した人数の割合が高く、D女子大学は「6.意見や考えが一致するから」を選択した回答者の人数の割合が高かった。K大学には目立った特徴はなかった。

[2] グループ内の友人関係

次に、所属しているグループの構成員間の関係について調べた。

吉田¹⁶⁾の解析結果を参考に因子負荷量が低い項目を削除し、「現在グループに所属している」と答えた学生に、友人との関係を尋ねる44の設問に「はい」あるいは「いいえ」で答えてもらった。設問間の関連を調べるため、得られた結果を因子分析によって解析し、因子の解釈も原則として吉田¹⁶⁾に従った。その結果を以下に示す。

1. 調査対象者全体の傾向

調査対象者全体の回答の因子分析結果とそこから推定された因子名を表3に示した。

因子Ⅰにおいては、「17.グループの友人と一緒にいると楽しい(因子負荷量0.83以下同様)」、「24.

グループの友人の人柄が好きだ(0.79)」、「42.大学卒業以後も、グループの人達と友人関係を続けたい(0.78)」等の因子負荷量が高く、グループの友人との積極的な関わりが示唆された。また、「31.現在のグループの友人達に満足している(0.76)」も挙げられ、グループの現状に満足している事が伺えた。一方、「2.大学にいるときは、ほとんど毎日昼食と一緒に食べている(0.58)」、「1.ほとんど同じ講義を選択しており、受講時にも近くの席に座っている(0.56)」、「3.一日の講義が終わっても、一緒に勉強したりおしゃべりをしたりする事が多い(0.52)」からは、グループの友人と学内で常に一緒に行動していることが推測された。和田⁴⁾は同様な大学生間の行動を「共行動」と名付けており、ここでも、これらを「共行動」と命名した。そこで因子Ⅰを「積極的・満足・共行動」を示す因子と解釈した。

因子Ⅱには、「6.用のある時だけ電話、メールをする(0.60)」、「18.グループの友人との付き合い

表3 グループの友人との付き合い方 [調査対象者全体]

因子	I	II	III
寄与率 (%)	23.8	7.2	5.0
固有値	10.5	3.2	2.2
設問	因子負荷量	因子負荷量	因子負荷量
17. 楽しい	0.83		
24. 人柄が好き	0.79		
42. 卒業後も友人関係を続けたい	0.78		
31. 満足している	0.76		
12. 何となく安心	0.75		
33. 友人から好かれない	0.74		
13. もっと親しく付き合いたい	0.73		
4. 特に親しい友人がいる	0.70		
21. 心を打ち明けている	0.68		
9. 講義やテストの情報交換	0.67		
23. 最高に気の合う友人	0.65		
38. たとえ傷ついても本音で語り合う事は大切	0.64		
26. 用が無くても電話、メールをする	0.59		
2. 毎日昼食と一緒に食べる	0.58		
1. 同じ講義を選択し、受講時も近くの席に座る	0.56		
3. 講義後も一緒に勉強やおしゃべりを	0.52		
6. 用のある時だけ電話、メールをする		0.60	
18. グループの友人との付き合いは表面的である		0.55	
25. グループ内で苦手な人がある			0.66
22. 他のグループが羨ましい			0.65
因子の解釈	積極的 満足 共行動	消極的 表面的	否定的 不満足

寄与率5.0%以上の因子を取り出し、因子負荷量の絶対値が0.5以上の設問を示した。

設問は、設問番号とともに内容を要約して示した。

は、表面的なものであると思う(0.55)」が含まれ、因子Ⅰとは反対にグループの友人と表面的に関わる消極的な姿勢が伺えた。そこで、因子Ⅱを「消極的・表面的」な関わりを示す因子と解釈した。

因子Ⅲでは、「25.グループ内で苦手な人がいる(0.66)」からグループ内の友人の一部に対して否定的な感情を抱いていることが伺われた。また「22.他のグループを羨ましく感じる時がある(0.65)」からグループの友人に満足していない事が推測された。よって、因子Ⅲを「否定的・不満足」を示す因子と解釈した。

さらに、調査対象者全体を男子学生と女子学生に

分け、それぞれの結果を因子分析を用いて解析した。

男子学生の回答の因子分析結果とそこから推定された因子名を表4に示した。因子Ⅰは、調査対象者全体と同様に、「積極的・満足」を示す項目が含まれていたが、「共行動」を示す項目のうち、「1.同じ講義を選択し、受講時も近くの席に座る」のみが含まれていた。従って、「積極的・満足・(共行動)」を示す因子とした。因子Ⅱにおいては、「30.グループの友人からどう見られているか気になる(0.74)」の因子負荷量が高く、友人からの評価を気にしていることが伺われた。岡田⁷⁾の示した「公的自己意識」のあらわれと解釈した。また、「共

表4 グループの友人との付き合い方[男子学生]

因子	I	II	III	IV
寄与率 (%)	24.6	7.8	6.2	6.0
固有値	10.8	3.5	2.7	2.7
設問	因子負荷量	因子負荷量	因子負荷量	因子負荷量
17. 楽しい	0.86			
44. 信頼している	0.84			
42. 卒業後も友人関係を続けたい	0.82			
33. 友人から好かれたい	0.73			
4. 特に親しい友人がいる	0.73			
24. 人柄が好き	0.73			
11. 自己主張できる	0.72			
31. 満足している	0.70			
9. 講義やテストの情報交換	0.70			
38. たとえ傷ついても本音で語り合うことは大切	0.69			
21. 心を打ち明けている	0.68			
8. 真剣に論議する	0.66			
12. なんとなく安心	0.65			
13. もっと親しく付き合いたい	0.64			
23. 最高に気の合う友人	0.55			
26. 用がなくても電話、メールをする	0.51			
1. 同じ講義を選択し、受講時も近くの席に座る	0.50			
7. 講義の代返を頼む	0.50			
30. グループの友人からどう見られているか気になる		0.74		
2. 毎日昼食を一緒に食べる		0.57		
10. 甘えすぎないようにしている		0.55		
14. グループから離れて行動するときは心細い		0.54		
43. 自分をもっと理解してくれる友人がほしい		0.51		
5. 一月に3回以上遊ぶ			0.68	
34. プライベートな領分に踏み込まない			0.64	
22. 他のグループが羨ましい			0.59	
19. 反対しないし、反対されるのも嫌だ				0.66
因子の解釈	積極的満足 (共行動)	公的自己意識 (共行動)	表面的不満足	対立回避

寄与率5.0%以上の因子を取り出し、因子負荷量の絶対値が0.5以上の設問を示した。

設問は、設問番号とともに内容を要約して示した。

行動」を示す項目のうち、「2. 毎日昼食を一緒に食べる(0.57)」が挙げられた。さらに、「14. グループから離れてひとりで行動する時は心細い(0.54)」が含まれており、大学構内において一人で行動する時に不安を感じており、グループで行動することで安心感を得ていることが伺われた。岡田⁵⁾が同様の友人関係を「群れ志向」と命名している。そこで、この因子を「公的自己意識・群れ志向・共行動」を示す因子と解釈した。因子Ⅲは、「否定的・不満足」を示す因子と解釈し、因子Ⅳを「対立回避」とした。

女子学生の回答の因子分析結果とそこから推定された因子名を表5に示した。因子Ⅰは、調査対象者全体と同様に、「積極的・満足・共行動」を示す因子と解釈した。因子Ⅱは、「表面的・群れ志向」を示す因子と解釈した。

2. 各大学の傾向

次に、各大学別にグループに所属している学生の

友人関係の傾向を示す。各大学の男女別の因子分析結果については、省略した。

① K 大学

K 大学学生の回答の因子分析結果とそこから推定された因子名を表6に示した。

因子Ⅰにおいては「44. 信頼している(0.90)」「24. グループの友人の人柄が好きだ(0.89)」等の項目が高い因子負荷量を示し、グループの友人との関係を積極的に評価しており、その関係に満足していることが推測できた。さらに調査対象者全体の因子Ⅰと同様、「共行動」を示す因子が抽出された。よって、因子Ⅰを「積極的・満足・共行動」を示す因子と解釈した。

因子Ⅱにおいては、「27. 現在のグループには仕方なく所属している(0.66)」「18. グループの友人との付き合いは、表面的なものであると思う(0.64)」が挙げられ、「消極的・表面的」な関わりを示す因子と解釈した。

因子Ⅲにおいては、「16. 友人によって話す内容

表5 グループの友人との付き合い方 [女子学生]

因子	I	II
寄与率 (%)	22.8	7.3
固有値	10.0	3.2
設問	因子負荷量	因子負荷量
17. 楽しい	0.84	
44. 信頼している	0.83	
24. 人柄が好き	0.81	
42. 卒業後の友人関係を続けたい	0.81	
12. 何となく安心	0.78	
31. 満足している	0.76	
33. 友人から好かれない	0.74	
13. もっと親しく付き合いたい	0.72	
4. 特に親しい友人がいる	0.69	
9. 講義やテストの情報交換	0.67	
38. たとえ傷ついてでも本音を語り合う事は大切	0.64	
21. 心を打ち明けている	0.63	
23. 最高に気の合う友人	0.60	
2. 毎日昼食を一緒に食べている	0.60	
26. 用がなくても電話、メールをする	0.57	
1. 同じ講義を選択し、受講時も近くに座る	0.55	
16. 友人によって話す内容が異なる		0.58
41. 話がおもしろくなくても熱心に聞く		0.54
14. グループから離れて行動するときは心細い		0.53
因子の解釈	積極的 満足 共行動	表面的 群れ志向

寄与率5.0%以上の因子を取り出し、因子負荷量の絶対値が0.5以上の設問を示した。

設問は、設問番号とともに内容を要約して示した。

表6 グループの友人との付き合い方 [K 大学]

因 子	I	II	III
寄与率 (%)	22.9	8.5	5.9
固有値	10.1	3.7	2.6
設 問	因子負荷量	因子負荷量	因子負荷量
44. 信頼している	0.90		
24. 人柄が好き	0.89		
33. 友人から好かれたい	0.83		
17. 楽しい	0.82		
38. たとえ傷ついても本音で語り合うことは大切	0.78		
42. 卒業後も友人関係を続けたい	0.78		
31. 満足している	0.72		
12. 何となく安心	0.71		
21. 心を打ち明けている	0.67		
4. 特に親しい友人がいる	0.65		
9. 講義やテストの情報交換	0.65		
13. もっと親しく付き合いたい	0.64		
2. 毎日昼食を一緒に食べている	0.59		
23. 最高に気の合う友人	0.56		
8. 真剣に論議する	0.56		
1. 同じ講義を選択し、受講時にも近くに座る	0.54		
26. 用が無くても電話、メールをする	0.54		
27. 現在のグループには仕方なく所属している		0.66	
18. グループの友人との付き合いは表面的である		0.64	
16. 友人によって話す内容が異なる			0.79
29. 楽しい雰囲気になるように気をつかう			0.63
30. グループの友人からどう見られているか気になる			0.60
因子の解釈	積極的 満足 共行動	消極的 表面的	儀礼的 公的 自己 意識

寄与率5.0%以上の因子を取り出し、因子負荷量の絶対値が0.5以上の設問を示した。
設問は、設問番号とともに内容を要約して示した。

が異なる(0.79)」、「29. 楽しい雰囲気になるように気を使う(0.63)」、「30. グループの友人からどう見られているか気になる(0.60)」が挙げられ、儀礼的な関係が推測された。そこで、「儀礼的・公的自己意識」を示す因子と解釈した。

② A 大学

A 大学学生の回答の因子分析結果とそこから推定された因子名を表7に示した。

因子Iには、K大学の因子Iとほぼ同様の特徴に加えて、「9. 講義やテストの情報交換をする(0.70)」、「7. 講義の代返を頼む(0.57)」の両方が含まれていたことから、「積極的・満足・共行動・功利的」な関わりを示す因子と解釈した。

因子IIにおいては、「36. 互いに傷つけないように気を使う(0.67)」、「29. 楽しい雰囲気になるように気を使う

(0.55)」、「41. 話が面白くなくても熱心に聞く(0.55)」が挙げられ、グループの友人関係の維持に気がつかっていることが示唆された。岡田⁶⁾はこのような友人関係の傾向を「気遣い」と名付けている。そこでここでも同じく因子IIを「気遣い」を示す因子と解釈した。

因子IIIにおいては、「30. グループの友人からどう見られているか気になる(0.69)」の因子負荷量が高く、友人からの評価を気にしていることが伺われた。さらに、「10. 甘え過ぎないようにしている(0.52)」、「27. 現在のグループには仕方なく所属している(0.50)」が含まれることから、グループの友人に対する消極的な関わりが示唆された。そこで、因子IIIを「公的自己意識・消極的」を示す因子と解釈した。

因子IVにおいては、「22. 他のグループがうらやましい(0.65)」、「19. 相手の言うことに反対するのも自分の言うことに反対されるのもいやだ(0.5)」が挙げられる一方、

表7 グループの友人との付き合い方 [A 大学]

因子	I	II	III	IV
寄与率 (%)	21.0	7.8	6.5	5.1
固有値	9.3	3.5	2.9	2.2
設問	因子負荷量	因子負荷量	因子負荷量	因子負荷量
44. 信頼している	0.85			
33. 友人から好かれない	0.81			
12. 何となく安心	0.79			
4. 特に親しい友人がいる	0.74			
21. 心を打ち明けている	0.72			
17. 楽しい	0.70			
9. 講義やテストの情報交換	0.70			
42. 卒業後も友人関係を続けたい	0.69			
31. 満足している	0.69			
24. 人柄が好き	0.66			
13. もっと親しく付き合いたい	0.62			
1. 同じ講義を選択し、受講時も近くに座る	0.60			
26. 用が無くても電話、メールをする	0.59			
20. 気をつかわなくていい	0.57			
7. 講義の代返を頼む	0.57			
2. 毎日昼食を一緒に食べている	0.53			
11. 自己主張できる	0.50			
36. 互いに傷つけないよう気をつかう		0.67		
29. 楽しい雰囲気になるように気をつかう		0.55		
41. 話がおもしろくなくても熱心に聞く		0.55		
30. グループの友人からどう見られているか気になる			0.69	
16. 友人によって話す内容が異なる			0.57	
10. 甘えすぎないようにしている			0.52	
27. 現在のグループには仕方なく所属している			0.50	
22. 他のグループが羨ましい				0.65
5. 一月に3回以上一緒に遊ぶ				0.61
28. 嫌な言動に対して何も言わず我慢する				0.56
19. 反対しないし、反対されるのも嫌だ				0.50
因子の解釈	積極的 満足 共行動 功利的	気遣い	公的 自己 意識 消極的	不満足 対立回避

寄与率5.0%以上の因子を取り出し、因子負荷量の絶対値が0.5以上の設問を示した。

設問は、設問番号とともに内容を要約して示した。

「28. 嫌な言動に対して何も言わずに我慢する(0.56)」, 「5. 一月に3回以上一緒に遊んでいる(0.61)」が含まれていた。自分のグループには不満足ではあるが、対立は避けて我慢して一緒にいるグループのあり方が示唆され、「不満足・対立回避」を示す因子と解釈した。

③ B 大学

B大学の回答の因子分析結果とそこから推定された因子名を表8に示した。

因子Iは、K大学、A大学と同様に、グループの

友人との関係を積極的に評価しており、満足していることを示す項目が含まれ、「積極的・満足」を示す因子と解釈した。

因子IIにおいては、「43. 自分をもっと理解してくれる友人が欲しい(0.62)」と思いつつ「41. 話が面白くなくても熱心に聞き(0.7)」, 「19. 互いの対立を避け(0.62)」, 「2. 毎日昼食を一緒に食べ(0.59)」, 「26. 用が無くても電話やメールをする(0.51)」友人関係が示唆された。グループの友人に不満を持ちながらも表面的には気をつかい一緒に昼食を食べて

表8 グループの友人との付き合い方 [B 大学]

因子	I	II	III	IV
寄与率 (%)	22.5	9.9	8.9	6.6
固有値	9.9	4.4	4.0	2.9
設問	因子負荷量	因子負荷量	因子負荷量	因子負荷量
17. 楽しい	0.85			
44. 信頼している	0.82			
31. 満足している	0.82			
42. 卒業後も友人関係を続けていきたい	0.80			
11. 自己主張できる	0.74			
24. 人柄が好き	0.73			
33. 友人から好かれない	0.70			
38. たとえ傷ついても本音で語り合うことは大切	0.70			
9. 講義やテストの情報交換	0.66			
12. 何となく安心	0.61			
20. 気をつかわなくてもいい	0.60			
16. 友人によって話す内容が異なる	0.55			
1. 同じ講義を選択し、受講時にも近くに座る	0.54			
13. もっと親しく付き合いたい	0.54			
8. 真剣に論議する	0.53			
4. 特に親しい友人がいる	0.52			
41. 話がおもしろくなくても熱心に聞く		0.70		
19. 反対しないし、反対されるのも嫌だ		0.62		
43. 自分をもっと理解してくれる友人がほしい		0.62		
2. 毎日昼食を一緒に食べている		0.59		
26. 用が無くても電話、メールする		0.51		
22. 他のグループが羨ましい			0.77	
40. プライバシーに深入りする話はしない			0.77	
7. 講義の代返を頼む			0.74	
25. グループ内で苦手な人がいる			0.53	
15. グループ以外の友人との交流が少ない			0.51	
3. 講義後も一緒に勉強やおしゃべりをする			0.50	
37. 一人でいる方が気楽			0.50	
27. 現在のグループには仕方なく所属している				0.71
32. グループの友人が困っていても関係ない				0.68
因子の解釈	積極的 満足	表面的 対立回避 (共行動)	不満足 功利的	消極的 無関心

寄与率5.0%以上の因子を取り出し、因子負荷量の絶対値が0.5以上の設問を示した。

設問は、設問番号とともに内容を要約して示した。

いることが推測され、因子Ⅱを「表面的・対立回避・(共行動)」を示す因子と解釈した。

因子Ⅲにおいては、グループの友人に対する不満足を示す項目(22(0.77), 15(0.51), 25(0.53), 37(0.50))が多く含まれる一方、功利的な関わりも示唆された(7(0.74))。そこで、「不満足・功利的」な関係を示す因子と解釈した。

因子Ⅳにおいては、「27.現在のグループには仕方なく所属(0.71)」し、「32.グループの友人が困っ

ていても自分には関係ないことだと思う(0.68)」状況が示され、グループの友人との関わりが浅く無関心であることが推測された。従って「消極的・無関心」をあらわす因子と解釈した。

④ C 女子大学

C 女子大学の回答の因子分析結果とそこから推定された因子名を表9に示した。

因子Ⅰは、他大学と同様、「積極的・満足・共行動」

表9 グループの友人との付き合い方 [C 女子大学]

因子	I	II	III	IV
寄与率 (%)	25.3	6.2	5.8	5.1
固有値	11.2	2.7	2.6	2.3
設問	因子負荷量	因子負荷量	因子負荷量	因子負荷量
17. 楽しい	0.94			
44. 信頼している	0.86			
42. 卒業後も友人関係を続けたい	0.85			
31. 満足している	0.83			
24. 人柄が好き	0.80			
12. 何となく安心	0.75			
38. たとえ傷ついても本音で語り合うことは大切	0.73			
9. 講義やテストの情報交換	0.73			
33. 友人から好かれたい	0.68			
13. もっと親しく付き合いたい	0.68			
2. 毎日昼食を一緒に食べている	0.68			
21. 心を打ち明けている	0.66			
4. 特に親しい友人がいる	0.65			
1. 同じ講義を選択し、受講時にも近くに座る	0.65			
3. 講義後も一緒に勉強やおしゃべりをする	0.62			
23. 最高に気の合う友人	0.62			
26. 用が無くても電話、メールをする	0.58			
28. 嫌な言動に対して何も言わず我慢する		0.71		
40. プライバシーに深入りする話はしない		0.69		
39. 深刻な悩みは相談しない		0.52		
22. 他のグループが羨ましい			0.68	
41. 話がおもしろくなくても熱心に聞く				0.65
30. グループの友人からどう見られているか気になる				0.54
18. グループの友人との付き合いは表面的である				0.50
因子の解釈	積極的 満足 共行動	防衛的	不満足	公的自己意識 表面的

寄与率5.0%以上の因子を取り出し、因子負荷量の絶対値が0.5以上の設問を示した。

設問は、設問番号とともに内容を要約して示した。

を示す因子と解釈した。

因子Ⅱにおいては「28. 嫌な言動に対して何も言わずに我慢する(0.71)」の因子負荷量をもっとも高く、「40. 世間話をする事が多く、プライバシーに深入りする様な話はしない(0.69)」、「39. 深刻な悩みは相談しない(0.52)」が含まれていた。落合・佐藤³⁾は同様の友人関係を「防衛的」と表現している。ここでも、この因子は「防衛的」な友人との関わりを示していると解釈した。

因子Ⅲには「22. 他のグループがうらやましい(0.68)」のみが挙げられ、「不満足」を示す因子と解釈した。

因子Ⅳにおいては、「41. 話が面白くなくても熱心に聞く(0.65)」、「18. グループの友人との付き合いは表面的である(0.50)」が含まれ、表面的な関わりが示唆され、さらに「30. グループの友人からどう見られて

いるか気になる(0.54)」が挙げられていた。よって、「表面的・公的自己意識」を示す因子と解釈した。

⑤ D 女子大学

D 女子大学の回答の因子分析結果とそこから推定された因子名を表10に示した。D 女子大学は、唯一5つの因子が抽出された大学で、グループにおける友人関係のあり方が最も多様であった。

因子Ⅰは、他大学同様「積極的・満足・共行動」を示す因子と解釈した。

因子Ⅱでは、気を遣いながらも(29(0.61)、36(0.50))自己主張でき(11(0.67))、その一方で「43. もっと自分を理解してくれる友人が欲しい(0.54)」と感じている様子が示唆され、「儀礼的」な関係を示す因子と解釈した。

表10 グループの友人との付き合い方 [D 女子大学]

因子	I	II	III	IV	V
寄与率 (%)	22.9	8.2	7.2	7.0	5.2
固有値	10.1	3.6	3.2	3.1	2.3
設問	因子負荷量	因子負荷量	因子負荷量	因子負荷量	因子負荷量
24. 人柄が好き	0.86				
13. もっと親しく付き合いたい	0.80				
42. 卒業後も友人関係を続けたい	0.80				
17. 楽しい	0.79				
12. 何となく安心	0.78				
44. 信頼している	0.77				
33. 友人から好かれない	0.75				
4. 特に親しい友人がいる	0.73				
31. 満足している	0.72				
2. 毎日昼食を一緒に食べている	0.66				
9. 講義やテストの情報交換	0.65				
26. 用がなくても電話、メールをする	0.60				
23. 最高に気の合う友人	0.59				
38. たとえ傷ついても本音で語り合うことは大切	0.58				
1. 同じ講義を選択し、受講時にも近くに座る	0.55				
21. 心を打ち明けている	0.55				
41. 話がおもしろくなくても熱心に聞く	0.51				
11. 自己主張できる		0.67			
29. 楽しい雰囲気になるよう気をつかう		0.61			
43. 自分をもっと理解してくれる友人がほしい		0.54			
36. 傷つけないよう気をつかう		0.50			
20. 気をつかわなくていい			0.87		
37. 一人でいる方が気楽			0.71		
6. 用のあるときだけ電話、メールをする				0.64	
19. 反対しないし、反対されるのも嫌だ				0.59	
7. 講義の代返を頼む				0.56	
8. 真剣に論議する				0.53	
5. 一月に3回以上遊ぶ				0.50	
40. プライバシーに深入りする話ほしくない					0.64
34. プライベートな領分に踏み込まない					0.55
因子の解釈	積極的 満足 共行動	儀礼的	独立的	功利的 対立回避	防衛的

寄与率5.0%以上の因子を取り出し、因子負荷量の絶対値が0.5以上の設問を示した。

設問は、設問番号とともに内容を要約して示した。

因子Ⅲでは、「20.グループの友人に対しては気をつかわなくて良い(0.87)」が最も高い因子負荷量を示したにもかかわらず、「37.ひとりでいるほうが気楽(0.71)」も含まれていた。これらから「独立的」な友人関係が推測されたので、因子Ⅲを「独立的」な関係を示す因子と解釈した。

因子Ⅳにおいては、「6.用のある時だけ電話、メールをする(0.64)」、「19.グループの友人の考えに反対しないし、自分の考えに反対されるのもいや

だ(0.59)」、「7.講義の代返を頼む(0.56)」が含まれていた。よって、「表面的・功利的・対立回避」を示す因子と解釈した。

因子Ⅴにおいては、「40.世間話をするのが多く、プライバシーに深入りするような話ほしくない(0.64)」、「34.グループの友人のプライベートな領分には踏み込まないようにしているし、自分も踏み込んでほしくない(0.55)」が含まれ、友人との「防衛的」な関係を示す因子と解釈した。

考 察

[1] グループ帰属の実際

「グループに所属している」かどうかを尋ねた結果、調査対象とした学生の約9割が現在「グループに所属している」と回答した。従って、グループ所属の有無については、大学間に傾向の差がなく、調査対象とした大学全てにおいて、ほとんどの学生がグループに所属していることが分かった。更に、所属グループの数及び、グループの構成人数、グループに所属したきっかけについても大学間に差はなく、調査対象とした大学生全体に共通した傾向があると考えられた。現在の大学生の多くは特定のグループに所属し、そのグループの多くが「3～4人」、「5～6人」で構成され、グループに所属したきっかけは物理的距離の近さと自然発生的な偶然の二点が主に挙げられると言える。

グループに所属している理由に関しては、「1 気が合うから」、「4 一緒にいて楽しいから」の割合が全ての大学において高かった。佐藤⁸⁾はグループに所属している理由を、①楽しさ...一緒にいる人がいると楽しいから。②物理的利益...援助してもらえたり、情報が得られたりして得だから。③共行動...一緒に行動できるから。④相談...相談できるから。⑤孤立に対する防衛...一人になりたくないから。⑥周囲から浮く事に対する防衛...周囲の目が気になるから。⑦存在価値の確認...自分の存在価値が確認できるから。⑧なんとなく...グループになるのが普通だから。の8個に大別している。今回の結果は①楽しさ、に当てはまると考えられ、大学生がグループに所属している主な理由は「楽しさ」であると言えるよう。

また、男子学生よりも女子学生の方が高い割合でグループに所属していた。さらに、本調査では所属グループが「ひとつ」か「複数」かに関しては、女子学生よりも男子学生の方が、「ひとつ」より「複数」のグループに所属している傾向が見られた。これは吉田¹⁶⁾のK大学における調査と同様の結果であるが、本調査の結果、これらの性差はK大学特有の特徴ではなく、調査対象とした各大学に共通した傾向であることが分かった。

一方、本調査でのグループ所属の実態に関して回答者の傾向に、大学により差がある項目があった。

例えば「構成人数」においては、A大学で、「9人以上」と答えた学生の人数の割合が、他の大学の2倍あり、有意に高かった。「グループに所属している理由」では、A大学、B大学とK大学、D女子大

学、C女子大学の間には次のような差が見られた。A大学、B大学では「9 食事をおごってくれるなど物理的に得をすることが多いから」と答えた学生が回答者全体の1～2%いたが、K大学、D女子大学、C女子大学では一人もいなかった。

A大学、B大学は各学生全体に対し、大学在生において男子学生の割合が女子学生に比べて高く、反対に、K大学は女子学生の割合が男子学生に比べて高い¹⁷⁾。D女子大学、C女子大学については男子学生はいないので、これらの差は男女差により生じると言えるかもしれない。

[2] グループ内の友人関係

本調査の対象とした大学生においては、グループの友人と積極的な関わりを持ち、その関係に「満足している」と自分のグループを評価する学生が多かった。しかし反面、友人との付き合いには消極的で当り障りのない防衛的な付き合い方を好んでいる者もいた。また、グループ内の友人の一部に対して否定的な感情を抱き、グループの友人との関係に満足していないにも関わらず、互いの関係の維持に気をつけている者も見られた。これらも、吉田のK大学におけるグループ内の友人関係の調査と同様の結果であり、K大学特有の傾向ではなく、今回調査対象とした大学全てに共通する傾向であることが分かった。

吉田¹⁶⁾は岡田⁶⁾が大学生にはあまり見られないとした「共行動」が、落合・佐藤⁴⁾が女子高校生特有に見られると報告した「同調」と類似した行動であると考え、「K大学の友人関係が女子高生の友人関係に近い」と述べた。さらに、K大学の友人関係が女子高生的であるのは、調査対象とした大学の女子学生の割合が非常に高かったことに由来すると考えた。今回の調査でも、調査対象者全体(調査対象とした5大学の内、2つが女子大である為、結果的に女子学生回答者の人数の割合が高い)、女子学生全体(調査対象者の中の女子学生のみを抽出)、K大学(大学在生に女子学生の割合が高い)、D女子大学(女子大学)、C女子大学(女子大学)に「共行動」が見られ、大学在生者に男子学生の割合が高いA大学、B大学では「共行動」は見られなかった。一方、男子学生全体(調査対象者の中の男子学生のみを抽出)のデータを解析した結果、グループの友人関係の特徴として「共行動」が抽出された。このことから「共行動」は男子学生にも見られる行動であると考えられる。そして「共行動」は、共学校の中ではK大学の男子学生にのみ出現していることが

ら、男子学生においては集団内の男子学生の数の比率が女子学生の数に比べて少ないときに出現する行動であり、女子学生においては集団内の女子学生の数の比率が男子学生の数に比べて多いときに出現する行動である可能性がある。従って、共行動と類似し、女子高生特有と言われている「同調行動」は、現在の男子大学生にも見られ、女子学生特有ではないと考えられる。和田⁴⁾は、「女性は親友に物事について同じように感じてくれる人(情緒的)を求めるのに対し、男性は同じ事をするのが好きな人(手段的)を親友として求めると指摘している」と記している。つまり男性に見られた「共行動」には手段的な意味が込められているかもしれない。「共行動」と「同調行動」の類似点、相違点等、これらの行動の詳しい実態についてはさらなる研究が必要である。

また、各大学別に回答を分析した結果、各大学の共通した特徴として、グループの友人と積極的な関わりを持ち、その関係に満足し、学内ではグループで行動を共にする傾向があることが挙げられた。その一方、固有値は高くないものの因子Ⅱ以降に各大学固有の友人関係の傾向が見られた。K大学では、グループの友人と積極的に関わり、その関係に満足している者が多いが、その一方、友人との付き合いには消極的でグループ内の友人の一部に否定的な感情を抱く者や、グループの友人とは表面的な関係である者が存在するなど、吉田¹⁶⁾の調査と同様の傾向が維持されていた。A大学では、グループの友人との共行動が見られるが、友人との心理的距離が大きく、集団から外れまいと群れ集まっている傾向が見られた。B大学では、内心では内面の開示等、友人との親密な関わりを求めていながら、グループ内の友人はそれを求めてないと感じ、現実では内面的関わりを避け、学生自身が自分の対人関係のあり方に必ずしも満足しているわけではないという傾向が見られた。C女子大学では、友人との価値観の違いを実感するのを避けるため本音は言わず、ありのままの自分を見せないように防衛的に友人と関わっていた。その一方、自分に対する友人からの批判に敏感な傾向が見られた。D女子大学では、友人と儀礼的に関わり、グループでいるよりもひとりであるほうが気楽と考える者がいた。

しかし、今回の調査では、各大学130名のみを調査対象としており、抽出された各大学のグループの友人関係に関する特徴が、それぞれの大学全体をあらゆる特徴であるとは言い難い。これらの大学間による差が生じたのは、調査対象者の人数が少ないことに加え、各大学の専門性や特性、大学在学生の男女の性比、それぞれの校風などによるものであるか

もしれないが、本調査からは不明であり、今後の課題である。

結 論

本調査結果から、今回調査対象とした5つの大学における大学生のグループ内の友人関係の特徴について、以下のことが分かった。

(1)本調査の結果、吉田¹⁶⁾の調査で明らかとされた以下の4点は、K大学のみに見られる特徴ではなく、調査対象とした5大学全ての大学生全般に見られる特徴であることが分かった。

- ① 調査対象の大学生の約9割が大学構内で特定のグループに所属し、その多くが「3~4人」、「5~6人」で構成されていた。
- ② グループに所属したきっかけとして物理的距離の近さと自然発生的な偶然の二点が挙げられた。
- ③ 女子学生より男子学生の方が、「ひとつ」より「複数」のグループに所属している傾向があった。
- ④ グループの友人と積極的に関わりを持ち、その関係に満足していると評価する学生が多かった

(2)グループに所属している主な理由は「楽しさ」であることがわかった。

(3)(1),(2)の調査対象者全体に共通した傾向に加え、グループの友人との付き合い方には、各大学固有の特徴が見られた。

(4)女子高生特有といわれている「同調行動」(本調査では「共行動」と記述)が、調査対象とした男子学生のみデータを解析した場合、および在学生の男女の人数比で男子学生の数が女子学生の数より少ないK大学において抽出された。

本調査結果から、調査対象とした5つの大学における大学生のグループ内の友人関係の詳細が明らかとなった。今回見られた特徴が各大学あるいは地域に特有のものであるのか、現代の大学生に普遍的なものであるのかについては、本調査からは明らかとされず、今後の課題である。

本論文は、川崎医療福祉大学医療福祉学科平井裕子さんの平成14年度卒業論文をもとにまとめたものです。彼女の努力に敬意を表し、深く感謝いたします。また、本調査に用いたアンケート結果の整理に用いた統計処理の方法について、川崎医療福祉大学医療福祉学部医療福祉学科、小河孝則教授にご指導賜りました。心からお礼申し上げます。

文 献

- 1) 和田実：同性友人関係, その性および性役割タイプによる差異．社会心理学研究, 8(2), 67-75, 1993.
- 2) 山中一英：大学生の友人関係の親密化過程に関する事例分析的研究．社会心理学研究, 13(2), 93-102, 1998.
- 3) 落合良行, 佐藤有耕：青年期における友達とのつきあい方の発達的变化．教育心理学研究, 44(1), 55-65, 1996.
- 4) 和田実：同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連性．心理学研究, 67(3), 232-237, 1996.
- 5) 岡田努：現代の大学生における‘内省および友人関係のあり方’と‘対人恐怖症’との関係．発達心理学研究, 4(2), 162-170, 1993.
- 6) 岡田努：現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察．教育心理学研究, 43(4), 354-363, 1995.
- 7) 岡田努：現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について．教育心理学研究, 47(4), 432-439, 1999.
- 8) 佐藤有耕：高校生女子が学校生活においてグループに帰属する理由の分析．神戸大学発達科学部研究紀要, 3(1), 11-20, 1995.
- 9) 天野隆雄：女子生徒のインフォーマル・グループ．アジア文化, 10, 87-95, 1995.
- 10) 佐藤有耕, 落合良行：女子高校生のグループの成員数と友人とのつきあい方の関係．筑波大学心理学研究, 15, 185-193, 1993.
- 11) 青木みのり：青年期における対人感情と他者概念との関連．社会心理学研究, 10(3), 190-195, 1994.
- 12) 榎本淳子：青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化．教育心理学研究, 47(2), 180-190, 1999.
- 13) 長沼恭子, 落合良行：同性の友人とのつきあい方からみた青年期の友人関係．青年心理学, 10, 35-47, 1998.
- 14) 上野行良, 上瀬由美子, 松井豊, 福富護：青年期の交友関係における同調と心理的距離．教育心理学研究, 42(1), 21-28, 1994.
- 15) 吉田浩子：川崎医療福祉大学生の現在．川崎医療福祉学会誌, 10(2), 429-433, 2000.
- 16) 吉田浩子：川崎医療福祉大学生の友人関係—グループに関する調査から．川崎医療福祉学会誌, 12(1), 151-160, 2002.
- 17) 蛭雪時代 8月臨時増刊 平成15(2003)年入試対策用 全国大学内容案内号, 260-748, 2003.

(平成15年5月20日受理)

University Student Relationships
— An Analysis of Questionnaire Surveys from Five Universities —

Hiroko YOSHIDA

(Accepted May 20, 2003)

Key words : RELATIONSHIPS, UNIVERSITY STUDENTS, QUESTIONNAIRE SURVEY

Correspondence to : Hiroko YOSHIDA

Department of Medical Social Work, Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.13, No.1, 2003 173-186)